

子ども中心の学びの実現を目指した数学指導

⑧ 南光中 齋藤 郁実 八幡中 竹内 一輝 日比野中 藤田 友輝 天神山中 東埜 耕大
丸の内中 圓司 直紀 久方中 横川 大我 萩山中 鶴飼 務

1 研究のねらい

中央教育審議会答申(2021)では、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と示されている。また、ナゴヤ学びのコンパス(2023)では、「子ども中心の学び」を「子どもたちが自分の興味・関心、能力や特性などに合わせて学習方法や学習内容を個別に最適化する学び」と述べている。本グループでは、このような「子ども中心の学び」の実現を目指すことで、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を見につくことができると考えた。

そこで、本グループでは、提示問題と学び合いの場面において工夫を講じることで、生徒自らが学びの面白さを感じ、学習方法や学習内容を選択できたり、教師に頼るのではなく、生徒同士が協力し合ったりできるような「子ども中心の学び」の実現を目指した数学における指導法について研究を進めていくこととした。

2 研究のねらい

(1) 研究の手立て

上記のねらいにせまるために、次の2つの手立てを講じ、実践を進めていく。

手立て① 提示問題の工夫

提示問題を工夫することで、生徒の興味関心を引き出し、生徒中心に学習を進めることができるようにする。生徒が学びの楽しさを感じることができる問題を提示したり、能力や特性などに合わせて問題を選択したりすることができるようにする。

手立て② 学び合いの場面の工夫

学び合いの方法や場面を工夫することで、生徒同士が協力し合い、生徒中心に学習を進めることができるようにする。ペア活動やグループ活動を取り入れたり、学び合いをする場面を工夫したりして、分からないことがあれば質問をすることができたり、自らの学びを周りの人のアドバイスを通して深めたりすることができるようにする。

(2) 検証方法

上記の手立てが有効であったかを、活動の様子から検証する。

【参考文献】 中央教育審議会答申(2021)『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』
名古屋市教育委員会(2023)『ナゴヤ学びのコンパス』